

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

報道
解説
評論

朝日ジャーナル

1977
Vol.19
No.42 220円
10・21

BOX67

特集 ダッカ事件—都市ゲリラと現代

〈対談〉 三好 徹 / 栗林忠男

全体主義を告発する新しい哲学者たち 渡辺一民

証言 カンボジア集団化の実態

読み人知らず「行政改革試案」のショック

昭和二十七年二月二十一日創刊 編集長 湯川秀樹 編集 湯川秀樹 発行 朝日新聞社 印刷 朝日新聞社印刷部 郵政省認可 通郵第九百七十六号 定価 220円 郵政省認可 通郵第九百七十六号 定価 220円

c082-007-004



特集 ダッカ事件—都市ゲリラと現代

国際社会は「海賊」にどう対処すべきか? 〈対談〉 三好 徹/栗林忠男…………… 6

日本赤軍の「大いなる誤算」…………… 鴨志田恵一…………… 14

暴力とつき合う方法 「丸腰日本人」の対応をめぐって…………… 編集部…………… 17

全体主義を告発する新哲学者たち 五月革命9年のフランスの知的状況…渡辺一民…………… 21

「軍縮なしには途上国の発展はありえぬ」
20年迎えたバグウォッシュ会議…………… 小川岩雄…………… 27

永井道雄の「教育の流れを変えよう」 高等教育の病理…………… 32

特派員リレーエッセー ワシントン・ロンドン ウラルの西で…………… 青木利夫…………… 40

〈連鎖エッセー〉 現代のモラル 学者の勇氣…………… 正村公宏…………… 82

証言・カンボジア集団化の実態…………… 『ル・モンド』紙特約…………… 87

米国の「北朝鮮」論議に突破口 朝鮮問題日米議員会議から帰って…………… 宇都宮徳馬…………… 92

〈ニュースの断面〉 思惑はずれた円対策…………… 編集部…………… 96

よみ人知らず行政改革試案のショック…………… 編集部…………… 98

〈インタビュー〉 まず議員の数を減らせ…………… 宮崎 輝…………… 104

日経連の行政改革試案 (要旨)…………… 105

BOX67

表紙 虞(く)

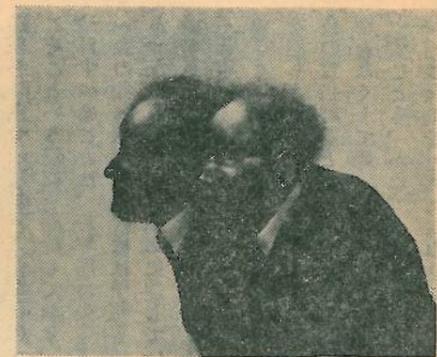
高橋 清

作者のことば この絵は私の心なのかもしれない。この文字の意は「おそれ」なのである。この世の見えない何者かに、おそれ、おののき、おびえている弱い者、心のふれ合いを求めながら、もどかしさに顔をこぼらせ、よりそのものに近づこうと身を乗りだす。空虚な時間…電車の中で、バスの中で、街の中でも、これらの仲間を見ることができる。顔はあきない心象風景である。

(F100号)

たかはし きよし 1929年京都生まれ 69年行動展初出品 70~75年3回受賞 74年異色三人展出品 75年シュル美術賞展出品 76年安井賞展出品 76年第10回現代美術選抜展出品 ギャラリー・ヴィツァン企画展出品 行動美術協会会員

制作・山城隆一 撮影・柴田泰彦



カット 逢坂卓郎 福井いつ子 福岡幸子 細矢正信 武藤純一

本

〈思想と潮流〉 『祈りの画集 戦没画学生の記録』
ヨシダ・ヨシエ…………… 61

〈批評と紹介〉
『高群逸枝』…………… 安丸良夫…………… 64
『人間・仮面と真実』…………… 小田 晋…………… 65
『西欧左翼のルネサンス—パリ通信—』…………… 柴田俊治…………… 66
『原爆民衆史』…………… 池山重朗…………… 68
『儒教社会の女性たち』…………… 中野美代子…………… 69

〈談話室〉…………… 70

木の国・根の国物語⑮ 伊勢…………… 中上健次…………… 44

ガス燈に浮かぶシャーロック・ホームズ③
「禁じられた性」の証…………… 小林 司・東山あかね…………… 78

〈カラー〉 根釧原野③ 毒草
文・畑 正憲/写真・伊東俊明…………… 52

文化ジャーナル…………… 72

列島診断…………… 38
地盤沈下の織物王国・福井…………… 岡本行正……………
「青松白砂」もいまは昔…………… 高崎裕士……………

サイドミラー 英国では廃止論、さて日本の参院は?…………… 110
日本語致 「花」と「影」と…………… 多田裕計⑤…………… 59
学校をひらく 高校生の朝鮮観…………… 50
読者から…………… 108

本誌掲載記事の無断転載を禁じます

ダッカ空港日航ハイジャック事件は、いろんなことを教えてくれました。空港チェックに抜け穴があること、乗っ取り防止契約が実効ないこと、マームド空軍参謀長の卓抜な交渉技術、犯人逮捕のため流血せずという声が意外に大きかったこと、一六億円と一般刑事を奪った犯人への怒りが強かったことなど。

政府の弱腰を突き上げられた園田官房長官は、「叱って下さった方々には、自分の子供が人質にとられたらどうします。犠牲者を出していいのですか」と答えていました。法と人命尊重という「善択」には、多くの人がやりきれない気持ちで判断に苦しんだと

思います。

政府は「行政改革」について、一〇月末までに具体案を出す予定にしていますが、本当にやる気なのでしょう。か、「大蔵官僚出身の福田サンでもできないのではなか」という失望感が早くも国民の間に広がっています。そんなとき日経連が「試案」を発表しました。実際にまどめたのは役人らしいということで「最が関」に波紋を巻き起こしています。もっとも、正面から聞くこと、あまり問題にしたいくないという態度ですが、増税が必要というときに、官庁だけがのんびりしているというのでは納得できません。

編集部



岩波書店

東京千代田一ツ橋/振替東京6-26240

キリシタン時代の研究

高瀬弘一郎著

十六世紀中期に始まるほぼ百年間、日本は内外ともに転換期を経験した。世界的な布教組織をもつイエズス会は、日本でも数多くの改宗者キリシタンを獲得し、「キリシタン時代」の立役者となった。その活動の基盤をなした経済活動を、歴大なイエズス会機密文書の分析をふまえて描く本書は、従来の「殉教の布教史」像を一変させた。A5判・七〇四頁 五〇〇〇円

岩波講座 日本語

全12巻・別巻1

第9回

文体

大野 晋 編集

文体を、使用された表記法・語彙・語法の差違、さらにはそれらの時代的・個人的またジャンル別による特徴ととらえ、日本語の文章の歴史を古代から現代まで概観する。中国から将来されて以来連続とつづいた漢文体、その訓読体、漢字のみで記しながら日本文である記録体、漢字仮名混りによる和漢混雑文等々から明治の言文一致体の創始と展開にまで説き及ぶ。A5判上製・月報付・四三六頁 二〇〇〇円

岩波全書

〈改版〉四冊

哲学 初歩

田中美知太郎著

B6判並製・二七〇頁 二二〇〇円

技術の哲学

三枝博音著

B6判並製・二二六頁 二二〇〇円

古代ギリシア文学史

高津春繁著

B6判並製・二六〇頁 一四〇〇円

民間信仰

堀 一郎著

B6判並製・三〇〇頁 一三〇〇円

の先史時代」をあきらかにしたマルクスの継承者として彼の名をあげているのである。

だがしかし、グリュックスマンの著書をいおうそのように今日の思想の流れのなかに位置づけるとしても、彼が従来革命の理論の抑圧的性格を告発したうえで、いったいどのような未来を展望しているのか、そうした問題がまだ残されている。グリュックスマン自身『指導的思想家』のなかでその問題には積極的にかたえてはいないが、わたしはこの書の序論の次のような言葉にとくに注目しておきたい。

「何に絶望せねばならぬか」

——思想の場と政治の場の断絶

実際のところ、わたしの見たテレビで、「何を希望することが可能か」というカントの命題を捨て「何に絶望しなければならぬか」ということからの出発を説いていたグリュックスマンは、環境保全の住民運動やブルターニュやコルシカの自治要求運動やフェミニストのそれなど、権力奪取を目指さぬ少数者の抵抗運動との連帯をあきらかにする一方、今年六月末にはブレジネフ訪仏の時期にあわせてサルトル、フーコーらによって組織された「ソビエト反体制知識人を守る会」に参加し、「ソビエトと中国はいずれも革命的社会というイメージを失い、

「わたしは自分が無知であることを知らぬわけではないと、予言者ソクラテス、再婚をためらうパニユルジュ、法を逃れるバルダミュはわれわれに打ちあける。無知であることを知らぬ連中がソクラテスやプラレーヤセリヌを禁じないかぎり、こうした非理論は人々に共有されるにちがいない。それに反発する連中のことが知りたければ、有名な死者略伝を讀む、かたれば指導者に会ってみればいい。権力をもつものはだれでもおのれを信じている。ソクラテスからG.I.の脱走兵まで、非理論の共有と無知にもとづく、友愛こそ、知られている唯一のデモクラシーの経験をつくりだすものなのだ」

の討論集の席上、左翼連合のかかげる企業の有化が国家権力を増大させ新しい抑圧を生みだすことへの不安を率直に表明したことも忘れてはならない。こうしたグリュックスマンの政治的立場が、もはや旧来の左右の概念をもってしては理解できぬものであることは言うまでもない。あえていえば、それは反全体主義とも呼ばれるべきものなのだ。

五月革命から九年、ヴァンセンヌの移転さえもはや大きな問題とはなりえない今日のフランスでは、外から見るかぎり五月革命の遺産はすべて一掃されてしまったと思えない。けれどもそれが、新しい高層ビルが建ちならび古い建物がどんでんこわされていくパリの生活のなかではまぎれもない現実であるとして、けつして死滅してはいないのである。たぶんその遺産は、ミッテランの左翼連合とジスカールデスタンの多数派とが対立しているそれとはまったく異なった次元で、これからもさまざまなかたちで継承されていくであろう。

「軍縮なしには

途上国の発展はありえぬ」

——一〇年迎えたパグウォッシュ会議

小川 岩 雄

一九五七年七月、核戦争による人類の破滅を憂慮する「ラッセル・アインシュタイン宣言」の呼びかけに答えて、湯川秀樹、朝永振一郎、故C・パウエル、故H・ムラー各博士ら、東西の著名な科学者二十数人がカナダの東海岸の静かな漁村パグウォッシュに集まり、核の脅威の実相と、破局を避ける方法を胸襟を開いて語り合っただけで、ことしはちょうど二〇年目に当たる。

「変化する世界の中の平和と安全保障」を主題として、去る八月二四日から二九日まで、ミュンヘンの目抜きのホテル、バイヤリツシャー・ホフで開かれた第二七回パグウォッシュ会議は、これを記念して出席者も二三八人（うち正式参加者は四六カ国二三三人、ほか各国国際機関からオブザーバー一五人）と、今ま

でなく大型のものになり、過去の成果の総括と当面の課題、および今後五年間の運動方針などが手広く議論された。名古屋大学の豊田利幸教授、日本学術会議の福島要一委員の両氏とともにこの会議に出席することができた私は、一段と深刻化した核軍拡競争と核拡散の現状を憂え、来年五月の国連軍縮特別総会までに何としても実質的な核軍縮の端緒をつかみたいとする全参加者の熱意に圧倒されるとともに、二〇年前には参加すらなかつた第三世界からの多数の科学者が、世界の三分の二の民衆の貧困と飢饉こそは平和を脅かすものであり、軍縮と新しい世界秩序の建設なしには新興諸国の自立と発展のみはなしと、こもごも論じ合う姿に目を見はらすにはいられなかつた。

誕生後二〇年といえは、人間なら「成年」を迎える年齢に相当する。まびしい東西冷戦のさなかに呱呱の声をあげたパグウォッシュ運動は、毎年の年次会議やシンポジウム、ワークショップ（専門作業部会）などに、すでに延べ二千人以上の科学者が参加し、年ごとに成長してきている。核兵器という、世界情勢の基本にかかわる深刻な問題について、イデオロギーや政治的立場を超え、全参加者の間に広い意見の一致をまもなく見いだせるようになった秘密の鍵は、「自らの良心以外の何ものをも代弁せず」、全く個人の資格で集まった参加者たちが、自由かつ冷静に話し合い、反対の意見にもどこまでも耳を傾けるといふパグウォッシュ独特の議論の進め方——いわゆるパグウォッシュ精神に沿った対話——に求められよう。

（わたなべ かずたみ・立教大学教授）

にした「ウィーン宣言」を発表するまでに発展した。以後毎回の会議の議事録は各国首脳に送られ、そこに盛り込まれたさまざまな提案や発想の基調は、とくに大国の政府関係者の興味をそそり、その影響力は次第に大きなものとなっていった。

過去二〇年間の運動の最大の成果は、何といっても東西両陣の冷戦の克服と緊張の緩和、そして平和的共存と協力の促進への少なからぬ寄与であろう。進行する「雪どけ」の中で、部分的核実験禁止条約（一九六三年）、核拡散防止条約（一九六八年）、宇宙空間（一九六七年）および海底（一九七一年）への核配備禁止条約、米ソ間のSALT（戦略兵器制限交渉）の枠の中でのいくつかの取り決めなど、核兵器の管理についてのさまざまな国際的合意が得られたし、またヨーロッパの安全保障についてのヘルシンキ協定（一九七五年）は、ヨーロッパがふたたび大戦の火元にならない見通しを強めた。さらに生物兵器の禁止条約（一九七二年）は、非核大量殺傷兵器の禁止が可能であることを示す好例となっている。これらの合意の達成をめざしてバグウォッシュが果たした役割は大きい。

しかしこのような歩みも、核破壊の回避、核廃絶などの究極目標からすればほんの第一歩にすぎず、道はまだほど遠い。東西の政治的「デタント」（緊張緩和）が確立されたにもかかわらず、大国の軍備競争は核兵器・通常兵器のいずれについてもむしろ激化しており、多くの小国も国際間の紛争の解決を軍事力に委ねる古典的な政策を相変わらず捨てていない。SALTは行き詰まり、中性子爆弾、巡航ミサイルのような新兵器が次々と登場し、軍縮交渉は停滞している。バグウォッシュの初心である全面軍縮の実現のためには、いっそうのたゆみない努力が必要であることを、二〇年目の世界の状況は如実に物語っている。「成人」したバグウォッシュ運動の行く手には険しい困難が待ちかまえているようだ。

定着した核抑止論批判

軍備競争激化の根源は一体何なのか。軍縮への努力の行き詰まりを打開する道はどこにあるのか。科学者はそれに対して何ができるのか。今までのバグウォッシュ運動の中で認識と活動には何が欠けていたのか。今回のミュンヘン会議の中心的な課題は、これらの問いに何らかの解答を見いだすことであった。

むろん僅か六日間の討論だけでは完全な解答などとはとうてい望めないが、主に、ここ五年間のバグウォッシュのさまざまな活動の成果を踏まえることにより、少なくとも解答のあらすじやヒントだけはかなりはっきりさせることができたとように思われる。以下、そのあらましを紹介しよう。

いままで米ソ両超大国の核軍備は、いわゆる「相互確証破壊」、つまり両国がいずれも万一手相から核攻撃をされたならば、すかさず相手方に確実に報復核攻撃（第二撃）ができる能力を備えておくことにより、相互に核の第一撃が抑止され、「平和」が維持できるという核抑止論に基づいて正当化されてきた。しかし一九七三年、「核軍縮への新しい構想」——科学者・技術者の社会的機能」をテーマとして京都で開かれたバグウォッシュ・シンポジウムが、全員一致で明快に結論しているように、核抑止論の教義は核軍備競争や核拡散を促進するなど、多くの弊害と矛盾を内在させており、バグウォッシュ運動全体の中にも、核抑止論に立脚して米ソの軍事力のバランスだけをひたすら追求する「軍備管理」だけでは、軍備競争は阻止できないであろうとの認識が次第に定着しはじめた（核抑止論の批判については、たとえば湯川・朝永・豊田三博士編『核軍縮への新しい構想』（岩波書店、昭和五二年八月刊）などを参照されたい）。

このような反省を反映して、こんどの会議でも、核軍備管理と軍縮についての第一作業グループの報告には、「戦略的核抑止の概念は広範な角度からの批判にさらされた」との、簡単な重要な記述が残され、また全体会議で採択された主文書のひとつである「バグウォッシュ運動の原則についての声明」中でも、データの拡大強化の要請とともに、「平和保持の手段として、相互確証破壊の考えに基礎を置く核抑止への依拠に代わるべき方策が見いだされなければならない」との主張が、盛り込まれることになったことは注目に値する。

むろん多くの参加者、とくに米ソの参加者の中には、核軍備競争と核拡散のゆくえを憂慮し、核軍縮の急務を強調しながらも、核抑止論の全面的否定には同調できず、SALTなどの軍備管理措置や「最小限核抑止」というような考え方に、実質的な意義を認める人が少なくない。このため、核軍備競争の根源をいまだに核抑止政策に帰着させることにはまだまだ抵抗が多いのも事実である。

しかし、巡航ミサイルや中性子爆弾などの新しい大量破壊兵器の開発・配備計画については、こういう科学者も、それが本来核第一撃をめざしている点で正統的な第二撃核抑止の原則に背反し、抑止の安定性を乱し、核実験の全面禁止などの手近な軍備管理措置の達成を妨げる点で——核抑止論の立場から見ても——きわめて危険であると判断しており、結論的には、核抑止力批判の立場をとる科学者を含めた広い一致が得られた。

こうして閉会後にバグウォッシュ協議会の名で出された「宣言」は、各国、とくに米ソ政府にこの種の新型兵器の配備計画の中止を強く要求している（ミュンヘン会議での中核子爆弾論議については、『月刊エコノミスト』一一月号掲載の私の小文を参照されたい）。



バグウォッシュ会議の開会式で、マッハー—フェー—西独研究・技術相の講演を聴く参加者たち（8月24日、ミュンヘン）—WWP

「宣言」はまた、南アフリカがまもなく核実験を行うであろうとのニュースを重視し、同国への核技術援助の中止を各国に訴えるとともに、SALTやMBFR（ヨーロッパの東西軍事力相互均衡制限交渉）など、軍備競争減速のための努力の行き詰まりは、政治的意思と政治的決断さえあれば打開できることを強調している。

縮の端緒を提供するものとして、ミュンヘン会議では来年五月に開かれる国連の軍縮特別総会に大きな期待が寄せられ、四日目の全体会議では、とくに国連事務局のヒヅエリネン博士から説明を受けた。そのさいの討論の中で、英国のノエル・ペーラー卿をはじめ何人かの参加者から、この特別総会を成功させるためには、事前に各国内および国際的規模で、バグウォッシュにつらなる科学者や、一般市民男女、さまざまな非政府組織などの意見や資料を十分に吸い上げるとともに、会議の内容や文書が広く公表される必要があるとの発言があったことは印象的だった。それは、従来の「請負外交」や「密室外交」の限界を思い知らされてきた科学者の切実な声と感じられた。

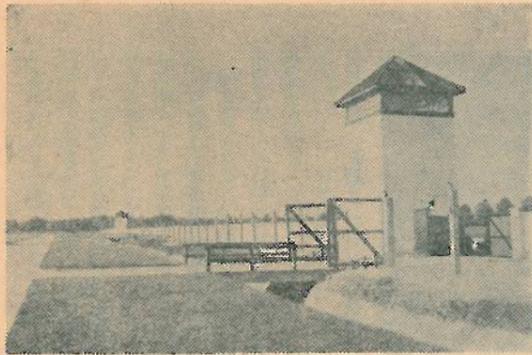
以上は、いわば狭い意味での軍縮問題プロパガンダに直接かわる論調であったが冒頭でも触れたように、こんどの会議のもうひとつの大きな特徴は、軍縮問題が新興諸国の発展の問題と密接に関係しているというグローバルな観点に立ち、今まで軍縮問題については比較的関心が薄かった第三世界からの科学者も活発に議論に加わって、Disarmament（軍縮）とDevelopment（発展）の「二つのD」を、極力切り離さずに取り扱おうとしたことであろう。

第三世界の参加者ふえる

バグウォッシュ運動はもともと核問題に端を発したといえるものの、発展途上国の発展の問題と第三世界の科学者の招請は、じつはごく初期から——少なくとも故バウエル博士や故ラビノヴィッチ博士ら運動の創始者たちの構想の中では——考えられていた。それを裏書きするかのようには、一九五八年の第三回バグウォッシュ会議にはインドからバーバ、クリシュナン、マハラノビスの三博士がはじめて参加し、会議が採択した「ウィーン宣言」は「開発の遅れた国々の極度に低い生活水準が国際緊張の一つの源泉となっている」ことを指摘したのち、「これらの国々の工業化の研究と計画を進めることは、世界の人口の大多数を占める人々の生活水準を向上させるだけでなく、高度に工業化された諸国間の紛争の原因をなくすことに役立つ」と主張している。

しかし出席者の九五%以上が「北」の科学者で占められていた当時において「発展」の問題は議論全体の中では保持の手段として、相互確証破壊の考えに基礎を置く核抑止への依拠に代わるべき方策が見いだされなければならない」との主張が、盛り込まれることになったことは注目に値する。

こうして、「発展への新しい戦略の中の自立の役割」をめぐる第二四回シンポジウム（一九七五年、タンザニア・ダルエスサラーム）、「発展、資源、および世界の安全保障」をテーマとした第二五回会議（一九七六年一月、インド・マドラス）、「軍縮、安全保障および発展」を主題とした第二六回会議（一九七六年八月、東独・ミュールハウゼン）などの成功の実績を踏まえ、こんどの会議には二一カ国三六人という多数の（絶対数では今までで最高の）科学者が第三世界か



30万人のユダヤ人がここに収容され、2万人が殺された(ミュンヘン近郊のダハウ・ナチス強制収容所) —筆者撮影

ら出席し、「軍縮なしには発展途上国の発展はありえず、逆に発展途上国の自立と発展は国際緊張を和らげ、軍縮の実現を助ける」という立場から、終始活発に発言して会議に貢献した。

「軍縮なしには発展途上国の発展はありえない」といわれる理由は、結局は軍備競争に伴うおそれるべき浪費と不正に帰着される。

南北の公平な秩序を求めて

今回の全体会議で採択された「バグワット運動の原則」についての「声明」はこの点に触れ、「先進国と後進国の間の日々拡大する格差と不公平や、将来の必要性などを無視して推し進められる資源の浪費は、公正で人間的な世界秩序の達成とは両立しない」と述べたのち、「第三世界をはじめ全世界の科学者が協力して、そのような公平な経済・社会・政治秩序を建設する上でどのような役割を果たせるかを調査せねばならない」と述べている。

そして「声明」は、「そのような発展の進捗や、公正で民主的な国際経済関係の改革の進行はデタントを強め、軍縮を妨げている諸問題を解決する鍵となるはずであり、その意味で『軍縮と発展』というバグワット運動の二大テーマは、平和な世界の追求というさらに大きな努力の中で不可欠なものとして分かち難く結びついている」と言い切るのである。

いいかえれば、これは、従来の軍縮努力の行き詰まりや不毛の一つの大きな原因が、軍縮をたんに狭義の外交交渉の問題とみなし、不正と矛盾に満ちた古い世界秩序を放置したまま、小手先の技術的解決だけを求めたところにある、という見方にほかならない。

核時代の挑戦を正面から受けとめ、人類の存続を求めて核軍縮への迷路をたどりつづけたバグワット運動の科学者たちはようやく、「すべての国々が地上の富と人間精神の遺産を分かち合う戦争のな

い世界」(「声明」から)がいわばワンセットで追求されない限り、どんな精巧な軍縮提案も画餅に終わるのであるという透徹した認識に到達した。

彼らはいま、来年の国連軍縮特別総会への期待とあわせて、一九七九年夏に予定されている「発展に向けての科学と技術の応用」についての「国連会議」へも深い関心を寄せている。またバグワット運動で当初から繰り返し語られてきた、一般市民への働きかけの強化や、若い世代への教育、とくに大学での平和教育の振興をめぐる科学者の社会的責任も、こういふ新しい観点からあらためて強調されたのであった。

「発展」の課題への意識の深まりと、第三世界の科学者の積極的な参加の機運は、当然のことながらまた、バグワット運動の企画・運営に当たるバグワット運動協議会のメンバーの、現在の選出基準についても重大な疑問を呼び起こした。現行の地域割り当てでは、二人の各地域選出メンバーのうち一人までが「北」の諸地域に割り当てられ、特に米ソにはそれぞれ三人も割り当てられているのに、「南」(アジア、アフリカ、中東、ラテンアメリカ)から推薦が求められているのは、わずかに六人に過ぎない。バグワット運動のような世界の良心とみなされている団体においてすら、人類の三分の二の人口がどうして適正に代表されていないのか理解に苦しむ(インソドのウドグアンカー教授の論文から)と

いうような観点から、「南」の枠の大幅な拡大を望む声は(主に第三世界からの参加者から)、かつてないほどに強く、次期協議会にその検討が委ねられることになった。

バグワット運動はもとも個人個人の集まりであるという原則を堅持してきただけに、この種のポストをめぐっての各地域グループからの「要求」の噴出は、多くの古いバグワット運動者(バグワット運動古のバグワット運動者)を驚嘆させ、たとえは第一回会議以来の熱心なバグワット運動者(オーストラリア)などは、「バグワット運動はもう死んだ」とまで筆者に漏らされた。だが、「北」主導の時代の退潮はそのまま、「南」を含めた軍縮と発展の新しい潮流への兆しでないと誰が断言できようか。

狂気と差別の支配を脱して

ミュンヘン会議ではこのほか、発展途上国の安全保障の問題や、エネルギー問題、資源問題、人口問題、環境汚染問題など、軍縮と発展の問題とならんで現代の世界が直面しているさまざまな深刻な問題について、科学者の立場から包括的な検討が行われた。

その結論の詳細にはここでは立ち入れないが、これらの問題の多くに共通する一般的背景は、伝統的な国際経済秩序のゆがみ——「非対称的(不平等)」構造の存在である。ここに二年間繰り返されておられたという地元医師の案内で、私たち会議参加者有志約三〇人はここを訪ねた。鬼島有造博士(「二度大決断……」など)の慰霊碑を思い出させる。

ここに二年間繰り返されておられたという地元医師の案内で、私たち会議参加者有志約三〇人はここを訪ねた。鬼島有造博士(「二度大決断……」など)の慰霊碑を思い出させる。

地球的規模で展開されてきた狂気と差別——思えば、核軍拡や後進国収奪と闘ってきたバグワット運動の「敵」の本体も、結局は人間社会に巣くうこれら二つの魔性であったようだ。理性と公平の永久支配をめざす私たち科学者の果てしもない巡礼は、いつたいつ終わるのであるか。

(おがわ いわお・立教大学理学部教授)

と、いくつかの多国籍企業の放恣な活動であり、どの問題の解決にも科学者の社会的責任のいっそうの自覚と国際的な(とくに「南北」および「南南」間の)科学協力が不可欠であるという認識では、全員の一致が得られた。

また、発展途上国の安全保障の問題と取り組んだ第四作業グループは、その報告中で途上国への武器輸出と途上国での近代的兵器の蓄積の問題に触れ、これらの地域での年間の武器蓄積は金額にして九〇億ドル、新規発注額は毎年二〇〇億ドルにも達することに注意し、その結果これらの国々が精密兵器の供給者にいよいよ従属し、ときには自国の主権をまったく空文化してしまうおそれがあることを警告している。「南」の側自体にも克服しなければならぬ問題があることを思いおこさせる重要な指摘といえよう。

カランチのバザールの雑踏と蒸し暑さと異臭、旅行者につきまとう乞食の子供の群れ。スラムの土管に寝起きする裸足の人々。立ち並ぶ英・米・日等の外国資本の大看板。豊かで清潔な町ミュンヘンとはあまりにかけ離れた貧しさと収奪の姿は、旅行者の心を暗くする。だがタクシの運転手は底抜けに明るく雄弁だった。「このアメリカ人はみんなCIAの手先ですよ(まさか)。イギリス人もフランス人もロシア人も信用ならな

い世界」(「声明」から)がいわばワンセットで追求されない限り、どんな精巧な軍縮提案も画餅に終わるのであるという透徹した認識に到達した。

使うほどにその良さがにじみ出る……



〈永久保証〉

品質重点主義をモットーにしているクロスは、創立以来130年にわたり、世界の人々に愛用されています。あなたのステイタスシンボル——クロス。

- 18金ムク ¥149,500(税込)
 - 14金ムク ¥92,000(税込)
 - 純銀 ¥7,500
 - 14金張 ¥7,500
 - 12金張 ¥6,000
 - クロム ¥3,000
- ※ボールペン、黒・青・赤・緑
※中文字用・細字用 各 ¥450
※シャープペンシル
※15本(丸筒入) ¥180
※替消しゴム3個入 ¥180

CROSS
SINCE 1846

株式会社クロス・オブ・ジャパン
東京都台東区根岸2-11-6 石巻ビル
〒110 TEL(03)875-1238(代表)
大阪営業所
大阪市北区中之島2-22新朝日ビル1F
〒530 TEL(06)227-5575